HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	カントの世界論 : 「複合体」と「系列」という二つの観点から［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	増山, 浩人
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11172号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55311
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Hiroto_Masuyama_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　増　山　浩　人

主査　教　授　新　田　孝　彦
審査委員　副査　教　授　藏　田　伸　雄
副査　教　授　山　田　貞　三

学位論文題名
カントの世界論－「複合体」と「系列」という二つの観点から－

本論文の意図は、従来アンチノミー論に局限されてきたきらいのあるカントの世界論解釈に対して、その哲学史的背景を明らかにしつつ、カントが一貫して世界を「複合体」と「系列」という二つの観点から論じており、カントの世界論は、アンチノミー論に尽きない広範で豊かな内容をもつことを明らかにすることである。そのため、本論文は、第一に、主にバウムガルテンの『形而上学』に即してカント以前の哲学者による伝統的形而上学における世界論の特色と構造を解明し、カントの世界論の哲学史的源泉を明らかにすること、第二に、カントの形而上学に関する講義録やレフレクシオーンを参照することで、伝統的世界論とカントの世界論の共通点と相違点を取り出すこと、第三に、カントの批判哲学を伝統的世界論との対決として位置づけるために、『純粋理性批判』の「類推論」と伝統的形而上学における「充足根拠律」に関する議論、および「モナド論」との比較検討を行い、さらにヒュームの宗教哲学に対するカントの応答を検討することで、これまではもっぱらヒュームとの対決として位置づけられてきたカントの因果論が、伝統的世界論との対決の結果として形成された世界論を介在させた議論として読み解くことができることを明らかにしようとする。

審査に当たっては、これらがどれだけ説得的に論じられているかを中心に検討した。第一の、伝統的形而上学における世界論の特色と構造を解明し、カントの世界論の哲学史的源泉を明らかにするという課題に関しては、第 1 章において、バウムガルテンの『形而上学』における世界論を詳細に検討し、その問題圏と構造を解明することで十分に果たされている。また第二の、カントの講義録やレフレクシオーンを参照し、伝統的世界論とカントの世界論の共通点と相違点を取り出すという課題に関しては、第 2 章と第 3 章において、両者の異同が、「実体」とそれに関連する諸概念、および「自然」という概念に即して丁寧に論証されている。さらに第三の、カントの批判哲学を伝統的世界論との対決として位置づけるという課題に関しては、第 4 章において、カントの「第二類推論」が伝統的形而上学における「充足根拠律」の普遍性の証明に対する応答としての議論であること、第 5 章において、カントの「第三類推論」が伝統的形而上学におけるモナド論を批判し、物理影響説を擁護する議論であることが論じられ、第 6 章においては、カントにおいて世界統一の根拠としての神を探求する方法である「Als-ob の方法」は、ヒュームによる「神の目的論的証明」批判に対する応答として解釈することができ、そこで使用されるカント独自の因果論は、伝統的世界論との対決を通して形成されたものであることが論じられている。

こうした議論の中でも、特に、カントの「類推論」全体を伝統的世界論に対する応答と位置づけ、アンチノミー論とともに、カントの世界論の中核をなす議論とする解釈は、増山氏独自のものであり、今後の類推論解釈において当然参照されるべき見解の一つとなるであろう。また、「第二類推論」をヒュームとの関係においてのみ理解する従来の解釈に訂正を迫るとともに、理念論をこそヒュームの因果概念批判に対する応答とみるべきであるとする解釈も斬新である。こうした解釈は、カントとヒュームの争点を検討しなおしたことに加えて、バウムガルテンの『形而上学』を詳細に読み解き、カントに影響を与えた伝統的世界論の問題圏を「複合体」と「系列」と

いう二つの観点において捉えたことの帰結としてもたらされたものであり、広い射程をもった解釈であると評価することができる。

本論文は、原典の丁寧な読解はもとより、先行研究の十分なサーヴェイに基づき、それぞれの章において、批判期におけるカントの世界論の具体的な諸相を浮かび上がらせることに成功している。もとより、本論文で取り上げられた問題だけで、カントの世界論の全体が詳細かつ完全に論じ尽くされたわけではなく、「系列」としての世界という問題に対するカントの議論に関してはアンチノミー論全体の検討が不可欠である。しかし、カントが批判期においても「複合体」としての世界と「系列」としての世界という伝統的世界論の問題を十分に引き受けた上で独自の世界論を展開しているという本論文の解釈そのものは十分に首肯できるものであり、本審査委員会は全員一致で、本論文が博士（文学）を授与するにふさわしいとの結論に達した。